

生涯にわたって音楽を愛好する礎を築く

前 各務原市教育委員会 学校教育課 指導主事
現 ぎふ清流国体推進局 競技式典課 音楽担当

江口 邦彦

岐阜県各務原市は、音楽溢れる街づくりを推進し、「音楽の街かかみがはら」として、幼児・小学校・中学校・高校・大学・社会人まで、系統的なサポートや音楽ステージを提供することで、市民一人一人が豊かな人生が築くことができるよう願っている。

特に吹奏楽は、十五万人規模の都市でありながら、市内八校の全中学校と高校三校、大学二校すべてに吹奏楽部がある他、各務原市消防音楽隊、市民吹奏楽団四団体、子育てで通常の活動が困難なお母さんのためのママさんブラス一団体もある。市内には合計十九の吹奏楽部・団がある。

また、市の音楽祭では、シエナウィンドオーケストラを招いて「ブラスの祭典」が開催されている。各務原市民にとっては、吹奏楽は大変身近な存在であり、市の音楽活動の根

幹をなしている。

一方で、吹奏楽を始めるきっかけとなる中学校の吹奏楽部は、「少子化による部員数の減少」「指導者不足」「楽器の老朽化」等多くの問題を抱えている。

吹奏楽部は、公的な運営機関（中学校体育連盟等）がある運動系の部活動とは異なり、これらの問題に対して、各学校で対応することが難しい状況にある。このような実態を踏まえ、各務原市教育委員会では、「学校」とい粹組みから「地域」という大きな粹組みの中で、小中学生の音楽活動をサポートするため、次のような取り組みを行っている

部活動という粹を超えて、基礎的技能を習得する「各務野吹奏楽アカデミー」の取り組み

「欠点の一つ一つを直せるように教えていた

だけのので、演奏していても楽しい気分になれます。」

「アカデミーに参加して（ホルンを）吹けるようになって、部活動も楽しくなってきました。もっともっと教えてもらって、先生のよう

に吹けるようになりたいです。」

「他校部員と触れあうことも楽しいです。」
生徒達から、こうした意欲的な声が聞こえてくる各務野吹奏楽アカデミーは、近隣の大学教員やオーケストラプレイヤーを講師に迎え、初期指導を全六回の継続した楽器ごとに
行う「入門編」、日本を代表する作曲家である保科洋氏を迎え、夏のコンクールに向けた指導を受ける「合奏編」、地元プロの奏者をゲストに迎え、プロ奏者と中学生が一つのステージをつくり上げる「各務原スペシャルコンサート」等、単発的な楽器の講習会を開催するだけでなく、年間を通して、八つの多彩な事業を計画・実施している。

特に効果を上げているのは「入門編」。入門編は文字通り、市内すべての中学校（全八校）の新入生を対象に、楽器ごとにわかれ、五月から七月にかけ全六回集中的に実技指導が行われる。

吹奏楽部の生徒達は、音楽に興味があり、夢と希望を持って取り組もうと入部している。しかし、楽器によって奏法が異なるため、

通常は二、三年生が一年生を指導する形がとられているが、限られた時間の中では、すべの時間を一年生の指導に費やすことはできない状況であり、慢性的な指導者不足に悩まされている。楽器の楽しさは、自分の思い通りに演奏すること。そして、聴いてくれた人



に拍手をもらうこと。興味だけでは、なかなか楽しさを見つけないことは難しい。

そこで、楽器ごとに異なる演奏技術力はブローが指導に当たることでもカバーしている。入門編では楽器の組み立て方や指使い、タンギング、ブレスまで一つ一つ丁寧に、正しい初期指導を行っている。

アカデミーの指導者からも「間違った癖がついておらず、上級生より指導がしやすい」「正しい基礎技能を習得することは、楽器が好きになる近道」「継続して指導することができるので、普段の練習の問題点もみつけることができる」といった声がかかれる。

ここで身に着けた基礎技能は、高校や市民バンドでの意欲的な音楽活動につながっていくと考える。

親子で参加する「音楽知識入門講座」の取り組み

「音楽検定事業」では、市内の吹奏楽部員一年生とその保護者を対象（約一五〇名）に、「音楽知識入門講座」と題して親子講習会を行っている。

「音楽知識入門講座」は、映像と

実際の音を効果的に用いることで、単なる知識の習得に留まらない、子どもたちの感受性に訴える内容になっている。また、日頃の吹奏楽の活動や音楽の授業と結びつけたプログラムにすることで、一層、子どもたちが主体的な学びを推進できるようにしている。さらに、CDやDVDの音源だけでなく、学校の授業では体験することができない、エレクトーンによる生演奏を加えることにより、子どもたちの興味関心を高めている。

唱歌「どんぐりころころ」では、エレクトーンにて原曲の演奏を聴いた後、リズムをスイングに変化させることや、ブルーノートを使用することにより、ジャズテイストに味付けされた「どんぐりころころ」を鑑賞した。童謡「チューリップ」や「ちょうちょう」では、エレクトーン奏者が即興で旋律をアレンジし、長調と短調の違いを聴き比べた。

短く、馴染み深い楽曲であるので、比較して鑑賞することにより、楽曲の特徴を形づくる要素を明確に実感することができた。楽曲の特徴を形づくる要素を明確にすることは、様々な楽曲を演奏したり鑑賞したりする上で、大きな指針の一つになる。また、新学習指導要領に示されている共通事項の再認識にもつながっている。

先日ある小学校を訪問した際、お昼の校内

放送でハチャトウリアンの「仮面舞踏会」が流れていた。

小学校一年生に「この曲知っている？」と尋ねてみると「うん。知っているよ。真央ちゃん（フィギュアスケート 浅田真央選手）の曲だよ」と答えが返ってきた。小学校一年生が「仮面舞踏会」を認識していることは、うれしい限りである。

しかし、音楽講座を受講した中学校一年生に対して同じ質問をしたところ、まったく同じ答えが返ってきた。

この中学生は、多くの音楽経験や体験をしてきているだろうが、知識としてのつながりが得られていないとも考えられる。もし、小学校の授業の中で鑑賞したであろう「剣の舞」と同じ作曲者であることを理解していたのならば、この音楽に物語が存在していることを知っていたのならば、また音楽の要素をもとに鑑賞する能力が備わっていたのならば、違った反応があったであろう。

子どもたちにとって、音楽そのものを含む情報は増えているが、それを味わったり整理をしたりする時間は減っている。したがって、その時間を確保するために必要な音楽知識の習得が重要である。

また、この取り組みの大きな柱となっている「親子参加」においても成果がみられた。

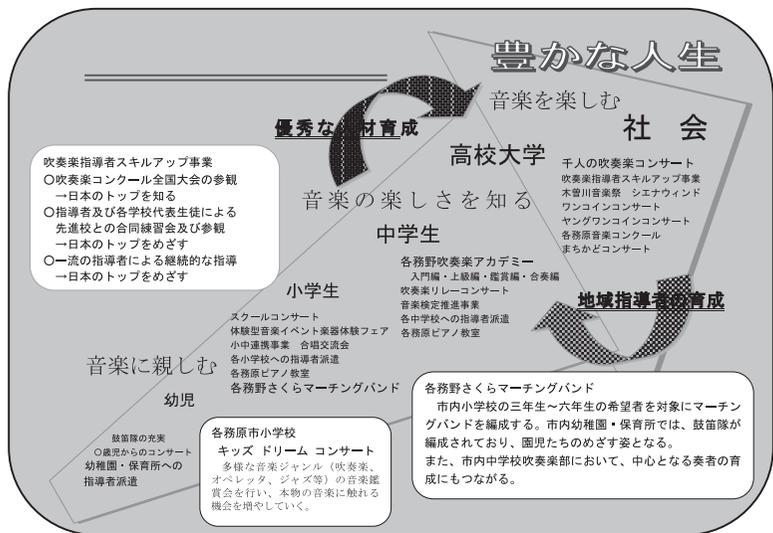
実際に受講した保護者は、「同じ曲でも演奏者によってこんなにも曲の感じが変わるのですね。娘の先輩が演奏している、ファミリー「三角帽子」のCDを購入したいと思いました」「リズムが変化するだけで音楽の感じがこんなにも変わるなんてびっくりです。ジャズもいいものですね」と感想を話している。

保護者に対しても積極的な参加を呼びかけたことで、子どもたちの活動の様子を知ってもらうとともに、お父さんやお母さん自身が音楽を学ぶ一助になったとも考えている。

地域の指導者が小学生の音楽活動を支援する「各務野さくらマーチングバンド」設立

各務原市教育委員会が主催となり、平成二二年五月に金管楽器・打楽器を中心とした「各務野さくらマーチングバンド」が設立された。当楽団は、市内小学校全十七校のうち、十六校の三年生から六年生七三名の初心者で構成されている。現在、毎週日曜日の午前中に定期的な練習が行われており、十月にはデビューコンサートを実現した。

かつて、各務原市には、多くの学校に金管バンドや鼓笛隊が存在していた。しかし、週五日制導入による練習時間の削減、指導者不足、楽器購入等の財政的な負担等において、現在では、活動している学校はゼロである。



このような諸問題は、岐阜県全体の問題でもあり、管楽器を含む合奏が経験できる学校は、ごく限られている。

各務野さくらマーチングバンドは、このような諸問題を解決しているとともに、指導体制にも大きな特徴がある。教育委員会が委託した常勤の講師三名以外に、毎回数十名のボ

ランティアスタッフが子どもたちの指導にあ
たっている。

ポランティアスタッフは、マーチングや管
打楽器の経験者である。その経歴は幅広く、
市民吹奏楽団に所属し、自身も楽器をバリバ
リ演奏している者、地元の大学で教員を志望
している大学生、このマーチングバンドの指
導をきっかけに音楽活動を再開する者等様々
である。

あるポランティアスタッフは「小学生を指
導するということをきっかけに、自分の音楽
人生が再スタートしました。十年ぶりに楽器
に息を吹き込みました」「自分が演奏するだ
けと指導をするのは大きく違うことを実感し
た。具体的かつ焦点を絞らなければ、小学生
にうまく伝えることができない」と語ってい
る。

これは、平成二〇年に掲げられた「音楽の
街 各務原」(前頁の図)の「優れた人材育成」
⇄「地域指導者の育成」のモデルとなる形で
ある。実際にこのような人(立場)の循環が
構築されるのは、まだまだ先であろう。しか
し、地域で育てられた人材がやがて地域の指
導者として次世代の若者を育てるサイクル
は、人々が生涯に渡って音楽を愛好する礎と
なると考えている。

